

麦王・権田愛三の教え ～麦を踏み、成長を促す～

熊谷地区の書き初め展で数多くの生徒が受賞しました。本校の生徒はいつも言う通り、様々な分野で大活躍です。このように自分の得意な面を生かし、伸ばしていくことはとても大事なことです。併せて、どんな人にでも苦手な面があるということを理解することも大事です。苦手なことが分かっているならば、それを補い、伸ばす方法はあるはずです。「得意なこと・苦手なこと 両方あっていいんだよ」という授業を、1，2年生は道徳や学活などの時間に担任の先生が行う予定です。しっかり聞いてくださいね。

さて、ここではこの時季に行われる「麦踏み」ということについてのお話をしていきます。熊谷市は麦の生産が盛んで、特に小麦の作付面積は関東NO.1です。本校周辺でも麦畑がたくさんあります。麦の穂が実り収穫期を迎えた初夏の頃には、麦畑一面が黄金色になっています。美しい風景です。収穫された小麦は、製粉されて小麦粉となり「うどん」「フライ」など、この地域の特色ある食文化のもととなっているのです。

ところで、なぜ熊谷では、小麦の栽培が盛んになったのでしょうか。その最も大きな理由が権田愛三という人の存在だといわれています。権田愛三は、今から170年ほど前の江戸時代、現在の熊谷市東別府に生まれました。別府は、籠原駅をはさんで反対側にある、三尻にとってお隣の地区です。当時の麦作りは生産が安定していなかったため、人々は食糧不足で困っていました。そのような状況を憂いた愛三は、良質な麦の増産を決意し、研究を重ねながら麦作りの技術改良に取り組みました。技術改良の結果、収穫量は5倍ほどになり、その技術は熊谷、そして日本全国に普及されました。人々は愛三のことを「麦王・麦翁（ばくおう）」とよび、今でも熊谷の偉人として尊敬されています。

愛三が改良した麦作りの技術は大きく2つあります。1つは「二毛作」。熊谷は雪があまり降りませんから、米の収穫が終わった冬の間、麦の生産を行う「二毛作」に取り組みました。このことで、土地の有効活用を図ることができるようになったわけです。

もう1つの技術が「麦踏み」といわれるものです。「麦踏み」とは、早春（節分が過ぎた2月のちょうどこれからの時季）に畑に出てきた3～5cmの麦の芽を、足裏で踏んでいく作業です。現在では、トラクターに重いローラーを取り付けて行われています。麦の芽を踏むことで、茎が太くなり、倒れにくくなります。また、一本の苗から枝分かれして成長することも確認されました。霜柱の防止、土壌水分の均一化などの作用もあるそうです。いわば、麦に「試練」を与え、さらなる成長を促すという技術なのです。

皆さんの成長にとっても「麦踏み」のような「試練」は欠かせないものだと思います。3年生にとっては、進路決定に向けての期間がまさに「試練」ですね。朝、寒い中での朝練習や、夜、眠い中での宿題なども「試練」でしょうか。親や先生に注意されたり叱られたりすることも「試練」のうちに入るかもしれません。

「若い時の苦労は買ってでもせよ」ということわざがありますが、中学生時代の「試練」も同じように思います。今は「喜んで…」という心境にはならなくて当然ですが、数年後・数十年後に「あの時に、〇〇ということ（試練）があっただけよかった」と思うときがくるはずですよ。苦しいこと、つらいことに負けないで踏みとどまり、ぐっと立ち上がる経験が皆さんの将来の土台となるに違いありません。

今は1年で一番寒い時期です。草花にとっての「試練」はこの寒さなのでしょう。寒さを乗り越え、美しい花を咲かせます。もうすぐ春がやってきます。頑張りどころです。